

牙王物語

上卷

戸川幸夫

上 卷
戸川幸夫



角川書店

牙王物語
上 卷

昭和三十三年十月十五日 初版印刷
昭和三十三年十月二十日 初版発行

定価二四〇円

著 者 戸 川 幸 夫

発 行 者 角 川 源 義

印 刷 者 中 内 あ き 子

製 本 者 鈴 木 俊 一

発 行 所 角 川 書 店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話九段(33)〇一一一(代表)

Printed in Japan

中光印刷・鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目 次

自由を求めて

魂の芽生え

知ること

片目のゴン

生と死の法則

新しい世界

村八分

初めての敗北

別離

あきらめ

七

一九

元

興

三

三

六

一〇一

一三

一三

知識と生存

一五

イオマンテの夜

一六

双つの顔

一八

種族の歌

一九

一人旅

二〇

罪と罰の掟

二二

装幀 佐藤泰治

牙王物語

上卷

自由を求めて

そのむかし、北海道一帯に栄えていたアイヌ人たちは、彼らが住む大陸の中央に変ることなく雪を冠り、雲表に輝く神々しい山岳のあることを知り、崇めて「ヌタクカムウシュッペ」と呼んだ。それは「沼や川多き神々の住める高原」という意味であった。

弓と矢をたずさえて、原始林の奥深く分け入った彼らは白雲の去来する山頂に神秘的な湖沼や、この世のものとも思えぬ美しい花々の咲き匂う別天地を見いだして、

「これは神の国にちがいない。山の神々の在す場所だ！」

と、汚れ多い身で神の御座近くに入り込んだ過ちを恐れ、大地にひざまずいて敬虔な祈りを捧げたのだった。

この山こそ、今日北海道の大屋根といわれる大雪山連峰である。

大雪山——何と雄大な呼び名であろうか。山は山を呼び、相い集まり、相い援けて見はるかす限り怒濤の押し寄せる様にも似ていた。石狩、十勝の両国にまたがり、北海道の中央高地約

二三万ヘクタール（神奈川県ほどの広さ）を占める山岳地帯が、この日本一の国立公園なのだ。

大雪山——それは一つの峰に贈られた名ではない。北海道の最高峰二、二九〇メートルの円錐火山旭岳を中心とする大雪火山群と、二、一四一メートルのトムラウシ山、二、〇七七メートルの十勝岳を中心とする十勝火山群、これと全く地質、成因を異にする水成岩の石狩連峰、碧玉のごとき然別湖をふもとの原生林に抱く然別鐘状火山群によって囲まれた城郭のような区域の総称であつた。そしてこれら山岳地帯の雪溪から迸り出た氷水は北西に流れて北海道一の大河石狩となり、南に落ちて十勝川となり、更川となり、西に走って忠別、美瑛の両川、東に去つて留辺蘂川となる。

山々には這松、蝦夷松、椴松、蝦夷板屋、岳樺、白樺、山毛櫸、白楊などの千古斧鉞を入れない寒地性の原生林が鬱蒼と繁茂して、陽の光を遮っていた。

第四紀洪積世に始まつた激しい火山活動で、何度もうり返した噴火と、その度に火口から流れ出る熔岩流や泥流、火山噴出物とによってとげとげした険しい山壁が形作られ、目も眩む断崖絶壁が至る所に出現していたが、今日、山の頂に立って眺めると、その山容も分らぬほどの大樹海が地の果まで続いていた。

そして日本一のこの原生林は大部分が人跡未踏であるため、熊をはじめ北狐、蝦夷鹿、蝦夷鼬、蝦夷狼、蝦夷野兔、鳴兔、縞栗鼠や大鷲、尾白鷲、鷲木兔、鷹、蝦夷雷鳥、星鴉など野生の鳥獣の自由で平和な楽天地となっていた。

雪溪を割ってほとぼしり出た石狩、十勝の源流は、この大密林の中を潜っては隠れ、露われては走る間に瀑布、溪流を併せて次第にその勢力を増し、やがては安山岩や流紋岩、凝灰岩によつて生成された山腹を穿ち、岩壁を削つて層雲峡（石狩川）、天人峡（十勝川）の景勝を作り出した。

もう春であつた。大雪の峰々は、まだ白い雪の砦を固く鎖して開こうとはしなかったが、春は里から上つてきた。

層雲峡への入口に当る上川の町の外れから、この辺りには珍らしい華やかな楽隊の響きが伝わつて、それが春を呼ぶかのように浮き浮きとした気分の人々の心を駆りたてた。

娯楽に飢えている上川町や近郷の人たちは、楽の音に誘われて、ぞろぞろと集まっていた。それは何年目かに一度、町外れに小屋がけをするサーカスがまたやって来たのだった。一頭のインド象が、もの珍らしげな見物人たちにさかんにご愛嬌をふりまいていた。

「東京サーカス」と銘うったこの一座は、型通りではあつたが、空中ブランコや玉乗り、自転車曲芸、綱渡り、裸馬の曲乗り、手品、空中ダンスなど多彩な番組を組んで客を喜ばせた。象のトンちゃん、トードンスや日本月の輪熊の花子の自転車乗りも人気を呼んだが、一番の呼びものはライオンのネロと格闘をするヨーロッパ狼のレッド・デヴィルの芸であつた。

ヨーロッパ狼は、世界の狼族の中でも最も大きく、立派で、堂々としている種類だが、レッド・デヴィルはそのヨーロッパ狼の中でも最も大型といわれるピレネー地方の産だったので雌

ではあったが、セパードの大きな雄よりも遙かに巨大であった。しかし、それは肩の高さや鼻の先から尻尾の先までの長さについていえることであって、体重はセパードの半分もなかった。きりりとひき緊った四肢、切れこんだ腹、このことはデヴィルがセパードに比べていかに身軽に振舞えるかということを示していた。

事実、彼女はライオンのネロと一つの檻の中に入れられ、^{せむ}僣僂の猛獣訓練士の

「ただ今からライオンとヨーロッパ狼のレスリング大試合を行います」

の口上で戦わせられる時に立派に証拠だてた。犬ならば到底、跳ね上れない高さにまで、デヴィルは飛び上り、しかも空中で、必要とあれば、くると宙返りや反転をして攻撃を中止したり、方向転換をすることが出来た。だからネロとの闘争は——それは馴れ合った二匹の野獣の戯れに過ぎないとしても——伯仲していて、見物客の手に汗をにぎらせるに十分だった。百獣の王のライオンより強いものはない、と信じこんでいた見物客はショウが終るとようやく我に還り、

「ヨーロッパ狼ちゃ、すごい猛獣だなア」

と、いまさらのように堂々と引き揚げてゆくレッド・デヴィルのうしろ姿に、より多くの賞讃を送るのであった。

レッド・デヴィル——「赤い悪魔」というこのニックネームは、彼女が戦いの最中に白い牙の間から見せる真っ赤な舌と血ばしった好戦的な眼に対して贈られたものであった。

その夜、レッド・デヴィルはくたくたに疲れていた。ちょうど日曜に当たっていたので、東京サーカスとしてはかき入れ時であって、デヴィルはいつもより三回も多く、ショウをやらされたからであった。

それだけにその晩は、ふきげんであった。最近僂僂の猛獣師が助手として傭い入れた飼育係りの峰公という若僧は扱い方について全く無智なくせに、こすっからくて、彼らの餌代をごまかして、少しずつ肉を削っていたからだった。この前までいた飼育係りの爺いさんは、よく面倒を見てくれて、日曜や祭日の夜は、必ず、

「今日はご苦労だったな」

と、レッド・デヴィルの頭をやさしく撫でて、いつもの餌のもらい分におまけをしてくれたから、レッド・デヴィルは、この爺いさんが好きだった。だが、その爺いさんが函館はこだての興行の時に卒中で急に倒れてしまって、今の峰公が爺いさんに代って来た。

レッド・デヴィルは峰公が大きらいだった。どんなに上手にショウをやって、座長のマキ親方からほめられた時でも、峰公は仏頂面で、

「ほれ、さっさと入れ」

と、蹴込むように犬小屋に追い込むからであった。

レッド・デヴィルは身体のかなッパ狼ではあったが、まだ小さいうちにこのサーカスに買われてきて、一座の犬たちと一緒に育てられた。だから、レッド・デヴィル自身は狼で

なく、犬だと思いこんでいた。彼女は人にもよく馴れ、犬にも——それは一座の犬たちのことだが——親しくしていた。

ところが、このごろは時々、妙な血の騒ぎを覚え始めていた。それはどこか遠くから彼女を、呼ぶ声だった。その声はデヴィルの鋭敏な耳の鼓膜を、直接に揺り動かすものではなかったが、心のどこかに響いてくる、どうにもならない呼び声であった。強いて言えば野性が呼ぶ、狼の血の叫びだった。

昼間、柵の中でライオンのネロと格闘している時も、レッド・デヴィルは時々あの呼び声を感ずる。その時はネロでさえ、はっとするほど、猛烈にデヴィルは暴れた。

ネロはまだ少年期から成年期になりかけの若ライオンで、ふざけるのが好きだった。レッド・デヴィルも、ついこの間まではネロと同じような気持でいたが、この頃ではそれももう興味を失いかけていた。デヴィルはもっと本能的な何かを求めていた。

そこへ今夜は食糧も少なかったので怒りっぽくなっていた。同じ箱に入られているセパードのエレンが親し味を見せにのそのそと、傍にやってきた時も、デヴィルは怒っていたので、いきなりエレンの首筋に牙を立てた。

「ギャー　ギャーン、キャン　キャン……」

エレンは、咬みついた当のデヴィルでさえ、驚くほどの大きな泣き声をたてて、小屋のすみに縮こまった。

“うるさい”という程度にしか咬んでいないつもりであったが、ヨーロッパ狼としての強い顎の力と鋭くて長い牙が、思いがけないほどの傷をエレンに与えていた。

峰公が走ってきた。峰公は血をたらしているエレンを見て、すぐに犯人がレッド・デヴィルの奴だ、ということを知った。

「この野郎！」

峰公は、長い鉄の棒を柵の間から差し込んで、デヴィルの身体を突こうとした。だが、身の軽いデヴィルが、峰公なんかにはやすやすと突かれるはずもなく、かえって同室のコリーマがいのエス公やポインターのボケの身体をこね回してキャンキャンという騒ぎを一層大きくした。

「どうしたんだい、一体……」

マキ親方が、ぼりぼりと頭をかきながら酔っぱらった顔で出てきた。

「へい、デヴィルの奴が、エレンを咬みましたんでね」

「デヴィルが……？ おとなしい奴だがな」

親方はそう言うのと犬小屋に近よった。

マキ親方はレッド・デヴィルの入っている犬舎に顔を寄せて、

「おいデヴィ公、どうしたい。何を怒ってるんだい」

と声をかけた。デヴィルは興奮はしていたが、マキ親方に対しては好意を持っていた。

「おい」

とマキ親方は峰公をふり返って、

「猛獣師の大将はどうしたい？」

と訊いた。

「へえ、さっき出かけました」

「またか……」

マキ親方は舌うちをした。僂僂の猛獣師は毎晩飲みによく癖があった。

「飲むのもいいがちゃんと始末してからにしてくんなくちやあ……」

マキ親方はぶつぶつと口の中で叱言を言ってから、

「もう春だな。デヴィ公が神経質に興奮するシーズンになってきてるんだ。お前はまた来たてだから分らねえだろうが、デヴィ公は毎年春になるとこうなんだから、外の犬と分けなくっちゃいけねえ」

「交尾期なんで……親方？」

と峰公はお愛想に聞いた。

「そうかも知れねえ。狼の交尾期は冬だと言うことで、春はむしろ出産期の筈だが、こいつあ人間に飼われてる故^{せい}かいつも遅れやがんだ。どうも気が立つようだから……そうだ、月の輪^{つきわ}熊の檻^{くわ}が一つ空いてたな。あれに移して少しゆっくりさせてやれ。怒らしちゃ駄目だぞ」

そう言い残すと、自分の部屋に戻っていった。その後姿が消えると峰公は、